



「人と関わる仕事」

広島市立北部医療センター安佐市民病院 脳神経内科 牧 龍我

はじめに、このたびの能登半島地震で被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈りします。

私の年越しは、当院の救急外来で迎えることになりました。日付がすっきりしているのに気づいたのは患者のカルテ記載をしていた時のことです。年末年始を病院で過ごした結果、就寝前に見たスマホが、あの地震の第一報を知らせてくれました。

「お正月は家族とゆっくり過ごす」という普通の日常が、被災者の方にとっては大きくかけ離れたものになったことでしょう。そして病院においてもまた、私自身を含め、患者、そのご家族、そして多くのスタッフが、予想外の日常を経験しています。そんな状況下の人々に対して、私は一人の医師として何ができるのか、ほんやりそう考えていた頃、この執筆の依頼を受けました。

休暇を取り、少しだけ帰省しました。家族、親戚と近況を話した後、いつも通り過去を振り返る時間が訪れました。話題が私の出生前にさかのぼったところで席を外し、ふと懐かしい小学校時代のアルバムを手にしました。卒業文集には、「将来の夢」と書かれ、その中には「人と関わる仕事をしたい」という一文がありました。人と関わらない仕事なんてあるのだろうか。小学生の作文に大人げなくけちを付けていたわけですが、同時に少し考えさせられる面もあったのです。

いま、私は医師という仕事を選び、患者、ご家族、他の医師、看護師、スタッフなど多くの人と日々関わっています。つまり「人と関わる仕事」の夢は充分に実現しているわけですが、

この仕事にはもう一つ、明確に関わっているものがあります。それが「病気」です。「病気」は人を「患者」に変え、家族を「患者の家族」に変えます。

「人」が「患者」になると、生活や環境が変わります。私たちは文献や先人の教えを元に、「患者」を再び「人」に戻す方法を模索してきました。しかし実際に「患者」が退院すると、私は達成感と同時に違和感を覚えます。確かに「病気」は治癒されているはずなのに、「患者」はなぜか「人」に戻らず、「患者」のまま私のもとを去っていきます。周りにいるのも同じく「患者の家族」のままです。

なぜか考えているうちに、「患者」と「人」は変化するものではなく、病気も「人」を構成するほんの一部であり、人に内包される要素と言えるのではないかと、思うようになりました。この意味で、「病気と関わる」ということはある種「人と関わる」ということの変容形であるような気がします。

冒頭で「医師として何ができるか」と書きました。医師の役割は診療ですが、それは「患者を人に戻す」という意味ではなく、病気に関わることで患者の「人」としての一部を担っていくことが、本質的な意味のように思えます。被災関連の報道で耳にする「寄り添う」という言葉は、これをシンプルに表現したもののように感じられます。

そんな風に考えると、子どもの頃の「人と関わる」という夢が、新たな意味を持ってきます。関わるというのは、寄り添うということ。初心を忘れず、人に寄り添える医師でありたい。そう思った2024年のはじまりでした。